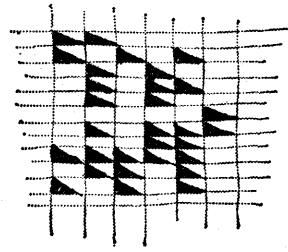


私の保育



宮川悦子

自分の保育のことを考えるのは、案外、むずかしい
のではないかと思います。自分を責めたり、逆に、心
をはずませることはあっても、冷静に、子どもにとっ
てはどうだったのか……という見方で振り返ることは
なかなかできません。保育そのものが、もともと子ども
もと保育者が一緒に作っていくものだからでしょう
か。

その意味では、今年一年、私はとてもよい勉強をさ

せていただきました。先輩が都立教育研究所の研究生
になれば、観察対象として私のクラスを選んで下さっ
たからです。

「見られていること」は厳しいけれど、対象児を追う
クールで鋭い目の奥に、私や子どもたちへの暖かい心
があると、何故か緊張どころか、のびのびと安心して
保育をすることができました。

今、ここで、あらためて、今日までの私の保育につ

いて振り返ってみたいと思います。

ひとりひとりを大切にすって何だろう

私が、保育の仕事について、もうすぐ三年になります。就職するまでは、公立幼稚園への知識もなく、又40人という人数の子どもたちの前で話をしたことさえなかったのです、初めてクラスを担任した時の入園式は、まるで嵐のような一日でした。緊張していて、先輩に「歌でも歌ったら？」とボンと背中をたたかれたことを、今でもはつきりと覚えています。

こんな頼りない保育者でありながら、夢のような理想だけは持っていました。子どもたちにとって楽しい保育をしたい、ひとりひとりが素直にふるまえる空気の優しい保育をしたい、そう思っていました。

ところが、現実には理想にはほど遠く、元気なこと、個性豊かなことにかけては、どのクラスにも負けなかったけれど、集まらない、話を聞かない、落ちつかな

い……といった注意も、私のクラスがいつも引き受けていました。もう少し、二年前の年少（4歳児）のクラスのことを思い出してみたいと思います。

1 誕生会のこと

遊戯室で誕生会があった時のことです。S男が、どうしても行きたくないと言いました。S男は、いつも他の子どもの遊びを一人でちょっと離れて見ていました。入りたいけれど、まだ、今はいい。今は、見たい。私には、こんなふうに映っていました。でも、誕生会の時、さすがに困り、なだめたりすかしたりしましたが、頑として動きません。

とにかく、この子が今、いやだと言っている。どうしていやなのか私にはわかっていないのだから、ひとまず、今は、この子の気持ちを受けとめなくてはいい……。と他の幼児を遊戯室に残して私はS男のそばにいました。会も終わり頃、どうにか気持ちの静まったS男を連れて行ったのですが……。最後まで、ど

うしてS男がいやがったのかはわからなかったし、当然、39名の子どもたちも落ちつかずにいたようです。

私はひとりひとりを大切にしていたでしょう。確かにS男ひとりのことはずっと気にかけていたけれど、それもS男にとってはどうなのでしょう。他の子どもたちにとってはどうだったのでしょうか。彼らももしかしたらS男とは違う場所で、S男と同じように不安定になっていたのかもしれない……。甘いと言われても、この身が二つになれたらいい、と思います。でも、それもできない私にはS男が泣くもつとつとその前に、しなくてはいけないことがあったようです。誕生会そのものを、S男にもおもしろそうだなと思えるような誘いかけや心くばりを……。

2 七夕かざり製作のこと

6月、それぞれが5種類の七夕かざりを作ることにまりました。年少の作品としては確かに疑問の残る活動内容です。私は、ここで、一斉活動として行なわな

いこと——に頑固になりました。

自由遊びの中で、40人に少しずつ誘いかけをしたため、バラツキができました。7月7日が迫ってくる、「おはようございます」の挨拶のすぐあとに、「ねえ、A君、三角つなぎを作ろうね」と半ば強いるように声をかけたりしました。私が、一斉形態を拒んだのは、一体、何のためだったのでしょうか。今から思うと、一番の理由は、私自身が嫌いだっただけからでしょう。

△△△や◇◇◇に気をとられて、今、子どもたちが、どこで、何をして、どんな気持ちで遊んでいるのか、という大切なことへは、心を向けることさえできませんでした。

今、2回目の年少を担当しています。頑固なこだわりも少し消えて、皆と一緒に遊ぶことも楽しいな、っと思えるようになりました。でも、ひとりひとりを大切にすることなにかについては、もう一

度、考えてみたいと思っています。言葉や概念による理想としてではなく、目の前にいる子どもの表情や目の輝きを拠りどころにして、考えてみたいのです。40人という人数、私の保育の未熟さ、幼稚園の環境……などなど。これらの現実から目を離さないで、私自身のテーマとして、これからずっと暖めてみたいな、と今思っています。

子どもの遊びを知ることってむずかしい

子どもの遊びを見ていると、楽しいこと、驚かされること、不思議だな、と思うことがたくさんあります。そして、私という大人とは、ずいぶん違った見方、感じ方をしているようです。一つのダンボール箱を通して、子どもたちと私のイメージに、いかに大きな違いがあるのか——を子どもたちから教えられました。このことを記録をもとに振り返ってみたいと思います。

1 9月24日（金）

何日か前から、電車ごっこが続いている。廊下に長くつなげた中型積木の上に乗る、首から笛を下げて、それぞれ運転手車掌になって遊んでいた。「ピーン……」「ドアがしまります!」「ガターン、ガターン……」「しぶや、しぶやでございませう」など。紙で切符を作ったり、パンチで穴をあけた。駅も作り電車の中では、お客さんがお弁当を食べたりしていた。

あの電車がもしも本当に動いたら、もっと遊びが盛りあがるかもしれないな、もっと楽しいかもしれないな。そう考えてダンボール箱をいくつか用意してみました。大きい箱、子どもの胴まわりくらいの小さな箱。これをつなげたら電車に見えるかしら……。などと、子どもが帰ったあと、私は一人で思いめぐらせてドキドキした気持ちで朝を迎えました。

2 9月25日(土)

大きなダンボール箱を見つけたH男はその中に入
ってみた。そばにいたY男は「よし、絶対に出な
いようにしてやる」と一人ごとを言い、箱のふたを
閉めた。ガムテープで押さえた。……偶然にふたが
あき、今度はY男が入った。——中略——中に入る
ことがおもしろくなったのか、2人でも入る。教師
が「10・9・8・7・6・5・4・3・2・1……
0」と言うと、2人はニコニコして飛び出てきた。
女兒も集まり「おばけみたい」「キャーッ」と逃げ
る。何度も繰り返した。箱がつぶれてしまうと、今
度はのりまきのようにくるまって、やはり、5・4
……0」と言って飛び出す遊びを笑いながら繰り返
していった。

子どもたちは、私が予想したものとは、全く違った
遊びを思いつき、ダンボール箱がこわれてもなお、そ
の「お化けびっくりばごっこ」を楽しんだようでし

た。

私は子どもたちに一本とられちゃったなと思いまし
た。考えてみれば、彼らはまだダンボール箱では遊ん
だことはなく、形も性質も未知の存在だったのです。
すぐに、私が考えたような電車のイメージを思いつく
方がおかしいのかもしれない。「中に入る」「ふた
をする」「とびだす」——こんな遊び方は単純だけれ
ども、ダンボール箱としては、最も basic で、ダンボ
ール箱と仲よくなるには最適だったようです。なにし
る、子どもたちがその遊びを示してくれた途端に、私
の方が笑い出してしまったくらいですから……。

子どもたちと接していると、この時と似たような経
験をたくさんします。ダンボール箱では、私も抵抗な
く、その遊びに入っていたのですが、時には、子ども
たちの思いつきがとても意外だったり、理解できな
かったりして、何ともいえない消化不良のような思い
をすることもあります。そして、こちらのイメージを
押しつけてしまうか、あるいは、逆に、子どもに引き

ずられるだけになってしまいうこともありました。

遊びを、まとめよう、とこちらが構えてはいけな
い。とにかく、子どもたちが楽しいと思うことはどん
なことなのか。一体、何が楽しくて、こんな遊びをし
ているのだろうか……。このことを、子どもたちの遊
びをよく見て、子どもたちと一緒によく遊んで、知ら
なくてはいけない、と思っています。とてもむずか
しいことだけでも……。

子どもの生活を知ること、ちょっとびり

つらい、とこうごと

私の勤めている幼稚園は町の幼稚園です。公立なの
で抽選で、いろいろな家庭のいろいろな子どもが通っ
ています。狭い一部屋のアパートに住む子どもも、大
きな御屋敷のような家に住む子どももいます。

子どもたちと過ごしていて、子どもの生活とい
うか、子どもなりに背中にしてしまっているもの、を垣間見
ることがあります。でも、たとえそれが目に入って

も、私には何もできないのがわかってくると、何とも
言えない気持ちになってしまいます。絵を描くのが大
好きな、でも大嫌いでもあるE子のことを書いてみま
す。

11月。動物園に遠足ででかけたあと、絵の具で動物
の絵を描くことにしました。殆どの子どもは、誘いに
応じて描いたのですが、E子は私に近づきもしませ
ん。声をかけても、「あとで」。「描かなくていい
の」^ノという返事ばかりです。でも、E子は普段は絵
が好きで、自由画帳もよく開いているし、その表現力
はむしろすぐれている方です。ある日、一人でポツン
としているE子に話しかけてみました。

「ね、E子ちゃん。どうして絵を描くのいやなの？
E子ちゃんが大好きになった動物のこと、教えてはし
いんだけどな。」

「だって、E子、おなががすくんだもの……。」
おなががすく。絵をかくとおなががすく。この意外
な言葉を聞いて、もしかしたら……と尋ねてみまし

た。

「お母さんが絵を描いていると、E子ちゃんおなががすいちゃうの？」

「うん。だってE子のママ、絵描いていると待っててつて言って、E子のごはん、作ってくれないんだもん……。」

E子の母親は絵画教室を開いている人でした。一人っ子のE子は、いつもそんな想いをしていたらしいのです。E子は負けん気で強い性格の子どもです。E子の強い口調で、泣かされてしまう子どももいました。ですから「おなががすいちゃう」という感じ方は、普段のE子とはなかなか結びつかない繊細なものに思えました。でも、母親だからこそ、E子は「おなががすいた」とは言えないのかもしれない……。そんなふうにも思えます。E子にとって、絵を描くことは、大好きだけど大嫌い、そんな相対する感情を抱かせることなのかもしれない……。その後、E子が描いてくれた、大きくていかにも強そうなライオンの絵を見なが

ら、こんなことを思っていました。

おわりに

心のままに筆をすすめ、ずいぶんまとまりのない文章になってしまいました。恥ずかしいくらいです。

今日、園庭で子どもたちが氷を見つけてきました。厚さが2〜3センチもある大きな氷です。子どもと一緒にさわってみたり、友だちの顔や足につけあったり、氷を空に向けて太陽をのぞいてみたり……キャアキャア大騒ぎでした。私も子どもに負けなくらい楽しんでしまいました。

——子どもに一杯遊んでもらいなさい——。教育実習を見ていただいた先生のこの言葉だけはどうやら今日も守ることができました。氷が融けると、また、春が一步步近づいてきます。

(世田谷区・多聞幼稚園)